

行所は久留米市西町神浦の私の自宅となつている。編集後記を私と黄君が書いた。私はそこで、

—— 発会以後僅か半年をへた今日——中略——「ゆっくり急げ」の諺通り、絨口と暴力、瀑潤と低迷のこのときを小さな石を積んでゆきたいと思うが——後略

としたためている。野田宇太郎さん、黄啓東君、江口洋君(医学生)熊川荒尾君(演劇)の小随筆、私の幼稚な断片、土岐峻茂君(医学生)、辻重行君(医学生)の詩などを掲載し、劇団第三舞台の広告をのせているが、これは演出池上健一さん(古賀ゆきさんの御主人)、熊川君の構成ということで団員を募集している。また、詩誌「魚の輩」の広告をしている。これは実際には「青い髻」と改題して発刊したはずである。野田宇太郎さんの随筆は、みじかいものながらかれの出発を記念する興味ぶかい文章である。タイトルは「醜聞帖」。

此の世で私には三つの事だけがゆるされてゐる。詩を書く事と、恋愛する事と、死ぬ事だ。その間隔の中に、技芸や、体育や、政治や、無意識や、経済が、こたごと詰まつてゐる。詩は文学したからとて直に書けるものではない。それは丁度花を持つ草や木が、芽生えたからとて直に花を着けないのに似てゐる。けれども文学すると言ふことも単に文学するだけでは成立たない。文学は人生観的な論理の結果である。先ず人は何よりも先に自分の存在に疑問を感じるであらうから。恋愛は誰でもする。だからむづかしい。これは肉体がもつ唯一の神聖な美しい祭である。たとえば必ず孤独である私の中に一人の女が、やさしい身振りで静かに住むようになる。而も誰も知らない。死もまた、たのしい存在である。二十九のはかない生涯を終つたノヴァリスがなした仕事は死に就いて、より正確に考えるたつた一事であ

つた。死の鳥に人生がはつきりして来る。死に就て考えず人生を語るなど笑止なことである。

今こうやって、詩、恋愛、死と並べてみるとあたかもロマンスチックなようだ。ところが、私の考えてゐることは寧ろクラシクな事である。何故かなら、この三つを語る他に私には人生を真面目に語ることは到底出来相にないからだ。

第二輯は十一月三十日の刊行である。ここでも私と黄君が後記を書いている。巻頭には井上癸造君(ビルマで戦死した井上光臣君の筆名)の「落生記断章」、吉塚清君(医学生)の「弱者」という随筆、野田宇太郎さんの「覚書」と題する艶っぽい随筆、緑川稔君(医学生)の「映画雰囲気論」、池上健一さんと熊川荒尾君の演劇についての覚書、土岐峻茂君の小品「恋愛方程式」田中稻城さん(のちの「文学会議」の同人)の小説「淵」、迫仁さんや辻君の詩などがおもな内容である。

発会からこの十一月にいたる約八ヶ月の文化的諸行事については、会報に記事がないし、私もほとんど失念しているが、ただ、会の最初の催しとして、内野さんの茶房で、坂宗一さんがえがいた新聞小説挿絵展をひらいて好評だったことを記憶している。(未完)

——久留米の文化運動について——(8)

『連文会報』第十二号(昭和五十三年十一月発行)

「仕事部屋」の第三輯の発行は昭和十一年四月二十五日である。巻頭には野田宇太郎さんが「青色趣味」という文章を書いている。短かいけれど、野田文学の叙情の根をあかす佳品であるといえる。進仁さん、田中稻城さん、金寿鉉(韓国)、鴨井雅



明君（医学生）などが散文を書き、私も愛についてのエスキースをしたためている。金文堂刊「月刊九州文化」や私の第二詩集の「よびな」「リベルテの会特輯久留米新図書館のためのパンフレット」の広告をのせ、会が主催した「河原崎権十郎・市川小太夫・中山延見子招待座談会」の記事をかかげている。「十一月三十日夜、三本松伊東食料品店階上広間にて。とくに河原崎氏の明治大正年間の演劇、名人論、松竹トラストについて、その他興味ある芸談、市川氏の歌舞伎の発生、成長、将来への考察、ならびに現代演劇界への不満をのべる気魄ある講演があった。十二時半散会」としたため、出席者のなかに今日の水俣市長の浮池昌希君、連文会長の内野さん、画家の永野義郎さん、佐賀の県議の森永恒範君などの名が見えるのもなつかしい。

第四輯は散佚して、どうしても発見することができぬ。第五輯は特輯「特への希望」とタイトルして各氏にアンケートを求めている。小倉の劉寒吉さん、博多の原田種夫さんなどの他会員が回答をよせている。もちろんこの号でも会員の短文や詩を収録している。いまの久留米保健所長の上木鴻君も文章をよせている。また坂宗一さんから私にあてたハガキの短信も見ることができぬ。

葉書

坂宗一

アソは葎吸っている。娘達は胸が厚い。外輪には瀧の大ツララがだらしなく無数に引掛って、其所から頭丈を見せる九重が高価な陶器の様に神々しい。アソは葎好きただけが面白く、朝鮮にはザラにあるスタイルで、眺める為に一晩二円も出すにはあたらない。名産のモロコシで作った紅ヒールは気のきかぬものである。一番自然なのは毛が荒れたアソ小馬である。

アソ宮地にて

短かいけれど、なんという生き生きした文章だろう。たしか

な自分の眼を持っている。阿蘇の陳腐と潑刺を稲妻のはやさで見さだめている。思えば、青木繁も坂本繁二郎も世にまれな名作家である。文学と美術の根を洗う水脈はおなじみのようである。

「仕事部屋」はさらにこの号で、久留米地方文化芸術団体名一覧を記録している。列記すれば、渋柿洋画会、来目洋画会、共鳴音楽会、九医音楽部、久留米ギター同好会、リリック重奏楽団、久留米ディスク倶楽部、久留米エスプレント会、梅野昆虫研究会、筑後史談会、久留米アマチュア写真クラブ、新興映画鑑賞会、第三舞台、「鏝」発行所、久留米詩話会。以上十五団体である。

まもなくリベルテの会はみずからの手で幕をとじる。人間の自由を主張し、文化の名のもとに青年たちが肩をくむこうした団体の存続をゆるさない時代が、靴音たかく近づいてくる。やがて私たちのめいめいは、時の波がしらをまともにかぶるのである。

(未完)

—久留米の文化運動について—(9)

『連文会報』第十三号(昭和五十四年三月発行)

騒然とした世状に追いたてられて、私の医師生活は久留米から鎌倉へ、鎌倉から下関へ移り、ふたたび久留米に舞いもどって、召集令状をうけとった。昭和十五年一月のことである。

その間、久留米の文化・芸術のうごきについての私の記憶は皆無に近い。ただ私が参加していた同人雑誌『文学会議』の仲間のなかから、火野葦平さんが芥川賞を受賞し、したがってその祝賀会が盛大に久留米でもよおされ、これには福岡や北九州の作家たちも参加したはずである。



私はすでに同人を辞退して、鎌倉における勤務医の激務の寸暇をひろって第三詩集を編集集中で、帰省など及びもつかなかつた。

小説の矢野朗さん、稲本富二郎さん、三木一雄さん、詩の俣野衛君、辻重行君、演劇の進仁さんなど出席しているはずである。

召集をうけた私は、久留米陸軍病院の管内生活ということで、見習士官室をあてがわれた。日曜の外出はゆるされたが、陸軍将校に準じた資格なので、民間の文化的会合に参加するなど不可能で、わずかに、福岡のブラジレイロにおける原田種夫さんの小説集出版記念に、軍服のまま素知らぬ顔で出席したのがただ一つの例外であった。

このときの白秋ははじめての里帰りをして参席し、西日本の若い作家や詩人たちの花やいだ祝辞がつづいたが、それを空々しい思いで聞いて、白秋の素顔に接したことだけに満足をおぼえて帰營したものである。

昭和十六年十二月八日開戦となる。この日から、悲惨な終戦にいたるまで、文化運動についての私のノートはまったく白紙である。

開戦の日は、私たちの輸送船団はパラオ島に錨を下していた。すなわち日本の陸軍として最初に赤道を南下した部隊である。私はすでに軍医少尉となり、防疫給水班長として数十名の部下をもっていた。これからは日本の消息とはなれるばかりで、その芸術とか文化の動静がたわわはなかつた。

従軍文士としての火野葦平さんの活躍や、郷土の西部軍司令部附の岸田勉君の文化活動などが、風のたよりにかすかに耳にとどくのがせい一ぱいだった。久留米地方のくわしい状況についてなら、三木一雄さんや俣野衛君たちが、かなり鮮明に記憶

しているだろう。

三木さんの矢野朗をえがいた小説は、戦時の久留米文学史のすぐれた資料になる。推察すれば、当時の久留米文化協会は、諸事統制の一つとして軍のすすめによって結成されたものであり、盡忠報国の志の表現法としてのカタにはまった動きにすぎず、真の生々発刺には欠けていただろう。

前記の矢野さん、三木さん、俣野君の他に、小鳥の平野医師、絵画の坂宗一さん、松田諦晶さん、東梅里さん、カメラの山浦翠村さん、俳句の田中彦影さん、三原草雨さん、安部春声さん、ピアノの藪文人さん等が名をたらねておられたことだと思う。

—久留米の文化運動について— (10)

『連文会報』第十六号 (昭和五十五年三月発行)

私が日本敗戦のしらせを受けたのは、ビルマとタイとの国境線にあたるチーク林の山中である。ここからの象の背を借りてタイの平原へ降り、徒歩でバンダラとよぶ河岸の村につき、帰国の日を忍耐よく待ったのである。捕虜の身には最初に大きな愁いがあり、やがて日本の青年としての決意に至る。生を得て母国へかえりついたら、母国の文化の回復に余生を投じよう。未熟とはいえ戦争という荷酷なときをくぐってきた批評精神を胸にすえて、心ある友人たちとふるさとの文化運動をはじめよう。そのとき早くも私の臉には、戦時中西日本新聞で活躍した岸田勉君の顔があつた。

昭和二十一年の五月、久留米に復員して早速いまの住所に診療所をひらき、岸田君と連絡のとれる機会を待った。内野秀美さんはまだシベリヤから復員していなかつたし、二宮冬鳥さんの歌人としての成熟を私は知らなかつた。



つまり、戦後の精神をもって文化活動をおこす良き仲間として、岸田君の名ただ一つが頭の中にあつた。恩師の山村秀一先生のお世話で、岸田君と顔を合わせたのは、岸田君のメモによればその年の十一月一日。文化運動についてのふたりの構想にへだたりはなかつた。

岸田君は山村秀一先生、三原草雨さん等に連絡をとり、私は小野正男さん、菊竹豊平君、それから母校を介して知った二宮冬鳥さん、竹村覚さん等を誘つて、話はたちまち進展し、早くも十一月九日には発企人会をひらいている。

出席したのは、元市長であり俳人である後藤多喜蔵さん、鳥類文献の蒐集家であつた医師平野四郎さん、水彩画家の山村秀一先生、九州医専の助教授で歌人の二宮冬鳥さん、金文堂書店社長の菊竹豊平君、画家の岸田勉君、俳人の見原草雨さん、それに私を加えて八名。欠席者として田中政彦先生、工芸の豊田勝秋さん、音楽の藪文人さんを記録している。

発企人会においては、完全に民主的運営をくだして、行政機関からの金銭の助けをうけず会員自身の奉仕によつてのみ経営、会規も複雑をさけて簡単な約定数条をかかげたのみ。

したがつて会長を設けず、運営委員二名で会務をとり、岸田君と私がその任にあつたが、後になつて平野四郎さんを委員長にした。

会名については「久留米文化会」という案が出たが、「の」の字を挿み、「久留米文化の会」という軟性の名に決定した。石橋徳次郎さん、倉田泰蔵さん、中原隆三郎さん、菊竹大蔵さんを顧問にえらんだが、これは形だけのものであつた。事務所はしばらくは市庁舎前の記者クラブにおいたが、実際上は私の家で仕事をつづけた。

これが「久留米連合文化会」の前身であり、活動は日を追う

て多彩になつた。

昭和二十一年より昭和二十四年十月「仮称久留米文化連合」発会式までの行事については、連文の事務局にかなり詳細な記録がのこつているので、「久留米文化」（文化の会会報）第一号巻頭に私がしたためた舌足らずの小文をここに写して、当時を追憶するよすがとしよう。

郷土の文化のために

（招待の記）

戦後の最も安価な意味の文化流行もようやく下火になり、しかも、人々は忍耐と奉仕とを要する文化運動への興味をうしない、目前の利害のため奔走してやまぬ今日、文化団体の運営はきわめて困難であるが、今こそ地に根を下した質実な文化運動を遂行すべきときであると考える。久留米文化の会も発会以来すでに一年と三月をけみして、いくたの非難を浴びながら、前進とともに内省を、発展とともに脱皮をつづけている。それは趣味的な集団にすぎぬというもの、政治性の不足を指てきするもの、青年性の欠如をいうもの、またプロレタリアートの同伴者としての進歩性を有しないという非難、あまりに芸術分野に偏向しているという非難、さらに甚しいのは、一部芸術家たちの売名のグループにすぎぬという論難もある。こうした難じ方のひとつひとつを会は決して馬耳東風には聞きながさなかつた。文化の会の性格と構成について、たえざる省察をかさねつつ、歩一歩と改良改善を努力してきた。しかもまだまだ無力であり無為である。会が今もつともおそれているのは、当地方の文化人としての触覚・意志・熱情を有する人々にたいして、洩れなくしかも充分に礼をつくして、入会の招待を行つたであろうかということである。これはたしかに会の怠慢であるが、同時に未入会のそうした人々自体



の怠惰ともいえるのである。郷土の文化的啓発運動は興味としてではなく責務として、文化意識にみちたすべての人々によって遂行されねばならぬはずである。世代・職業・流派などの差別なく、多数の有志がすすんで入会されて、文化の会の中核からこれをゆさぶるような強烈な実践をしめしてほしいと願っている。文化の会の発展は枝葉事にすぎぬ。要は久留米の文化的上昇であり、良識の結集による封建性と非文化への戦斗である。

当時の文化的奉仕に力をつくしてくれた方々の名前をおもい出すままここに誌しておく。金文堂の支配人の川崎甲平さん、俳人の草野駝王さん、美術と音楽の荒巻敏康君、久留米大学教授の上田彰さん、俳人の古野子楓さん、美術の古川潤二さん、音楽の木下理助さん、医師の井上伝さん、書家の山田菱花さん、詩人の俣野衛君、音楽の高橋暁夫さん、俳句の長井盛利さん、など。ことに俣野君には会務処理上負うところが多かった。内に強烈な批評をもち、つねに自主的で青年性をもつという「文化の会」の性格を、連文の栄光ある歴史がうけついでゆくのである。(未完)

—久留米の文化運動について—(11)

『連文会報』第十七号(昭和五十五年七月発行)

「久留米文化の会」が活動を開始して、「連合文化会」へ脱皮するまでの三年間は、戦後の総合文化団体の新しいタイプを創りあげるための、燃えるような季節であった。日記をひもといてみると、毎日の一切を地域文化への奉仕という無償のことに賭けていたことがわかる。詩の仲間の俣野衛君も協力を誓ってくれて、会の事務に専念するようになった。

金文堂書店の川崎甲平支配人(詩人川崎洋君の嚴父であり、洋君はその頃八女高校の生徒であった)との連絡もつき、東京の雑誌社から金文堂の出版部長に招かれてきた室園草生さんも援助してくれることになり、私の発案で「市民月例文化講座」を開講するに至った。

講座の第一回は昭和二十二年十一月三十日。場所は久留米商工会議所の二階。案内のピラでは、挨拶岡幸三郎市長と予定していたが、何かの要件で出席されず、川崎甲平さんの開会の挨拶をいと口として、講義は二宮冬鳥さんの「短歌雑感」、岸田勉君の「外国人の日本画観」、平野四郎さんの「季節の鳥」。私が閉会の言葉でしめくくりをしている。第二回は二十三年の二月二十一日。会場は前回とおなじ。岸田勉君の開会の言葉、久医大教授上田彰さんの教壇慢相「話し手と聞き手」、私の「現代日本詩の課題、詩はほるびるか」、豊田勝秋さんの「九州の美術工芸」、荒巻長篠さんの「レコードによる名曲鑑賞」。この日の会費は十円であった。第三回は三月二十七日、岸田勉君の美術講話、草野駝王さんの俳句の話、荒巻敏康君の解説によるレコード鑑賞。第四回は会場を変えて日吉町聖母園にて。岸田君の美術、高橋暁夫教授の音楽についての講話、福岡から招いた小説家矢野朗さんと私との公開対談「肉体文学」。第五回の講師は山内六郎さん、藤本智薫さん、平野四郎さん、岸田勉君、これが最後の講座になって、その後は、たとえば二十三年七月三十一日の「耳で読む雑誌」のように一ひねりした企画に移る。

八月三日付の「九州タイムズ」は「耳で読む雑誌」をこんな記事で読者に伝えている。

東京あたりでは早くから催されている「耳で読む雑誌」がこのほど久留米文化の会主催で同市で試みられた。とかく紋切型



になりやすい文化講演会、座談会と違って、プログラムの編成や司会の工夫では面白い総合講座風のフニキで聴衆をひきつけることができるから、こんど久留米で試みられた。「聴く雑誌」の場合を簡単に紹介しておこう。

まず「表紙」は美術研究家岸田勉氏が担当、この雑誌が若い女性の教養向きに編集されていることを説明してそれにふさわしい表紙絵の構図や色彩を解説した。表紙絵に夏姿の人物を想定すればそこに夏のモードの暗示や批判を行うことができるし、原画と原色印刷の技術を教えることもできるわけだ。この表紙で読書（実は会場聴衆）の読者感覚をそそり「聴く雑誌」の内容を象徴しなければならぬから機知にあふれたあいさつぶりが必要だ。たしかに「これから何々先生方に有益なる御講演を……」といった風のしかつめらしい開催の辞よりもスマートであった。

次の「グラビヤ」は山浦翠村氏の担当、ほんものの雑誌の口絵と違って聴覚にうったえる写真なので苦しそうであった。

詩は丸山豊氏が自作誌「秋怨」を朗読、この詩にはカットがあしらってある——といって朗読誌を鑑賞するに便利ないように、まずカットの構図を前置きに説明しておいたのはたくみな方法といえよう。視覚的な近代詩の理解には、この程度の説明はぜひ必要である。原田種夫氏も自作小説を朗読、抑揚の乏しい朗読が惜しかったが、やはりある程度の「読む表情」が大切である。

音楽解説は九大美学教室助手荒巻敏康氏、レコード音楽を聴かせてこれに解説を施す「聴く雑誌」の目次のなかでは最も効果的な担当といえよう。

随筆は久留米医大助教授で歌人の二宮冬鳥氏、持ち前の風刺的口調でサンマータイムの不合理的を説くところ中だるみの雑誌

をピリツとさわやかなものにしたが、次の「ダンスのエチケツト」のページを割き過ぎて会場がややくたびれた感じであった。——中略——

なお暑さにうだつた会場を救うため「二二臨時特集のページ」といった形で会場からの出題による即興詩、即興短歌を丸山、原田、二宮氏らが担当、課題は「眼（まなこ）」——但し即興の詩歌を練る十数分間を間抜けしないように「レコード音楽鑑賞」をダブらせておいた。

以上のような講座の他、二宮冬鳥歌集、丸山豊詩集、竹村覚訳書などのそれぞれの出版記念会、鏡山猛教授を講師とした「筑後の古代文化を語る会」、平野四郎さんを囲んでの「高良山に小鳥を聞く会」、武藤直治さんを講師に「久留米の史的逸話を語る座談会」、美術については中村孫次郎さんのお宅での書画鑑賞会、写真展、石原寿市君の遺作展、青木繁古賀春江遺作展、活花講習会、音楽では小・中学生の第一回音楽コンクール、あけぼの復興音頭の審査、久留米地方では戦後最初の素人のど自慢会、俳句では桃青霊社献句会など、めまぐるしく多様な行事をおこしている。ほとんど身銭を切って催したわけで、手あたり次第に、質の高い会合も大衆的な会合もごちゃごちゃに企てられたところが面白い。当時は行政機関に、今日のように文化や福祉を前面に示える良識も余裕もなく、私たちは自立する市民意識の結集として「文化の会」の文化運動の展開に情熱を注いだ。まだ日本のどこにもない総合文化団体の最初のかたちを創りあげるといふ自負にみちて。